

金 融 市 場 動 向

—平成6年4月—

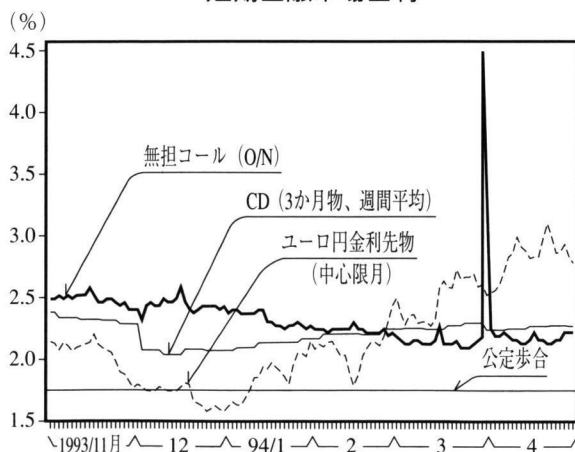
(平成6年5月18日)

1. 短期金融市場

4月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、月初に期末要因の剥落から下落した後、ほぼ既往最低水準で推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートも、引き続き低水準で推移した。また、ユーロ円金利先物（金利ベース）については上旬中急上昇した後、月末にかけて若干低下した。

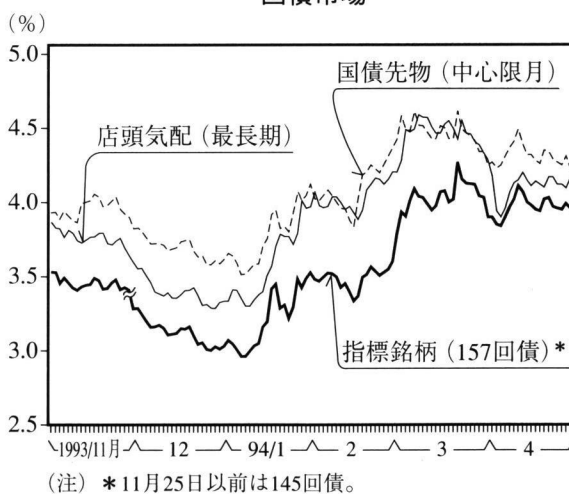
コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は43兆9,484億円と前月（45兆3,725億円）を下回った。

短期金融市場金利



3.935%で越月した（前月末3.900%、国債先物中心限月は4.200%＜前月末4.241%＞）。国債の出来高をみると、現物（店頭取引）は前月を上回った一方、先物は前月を下回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



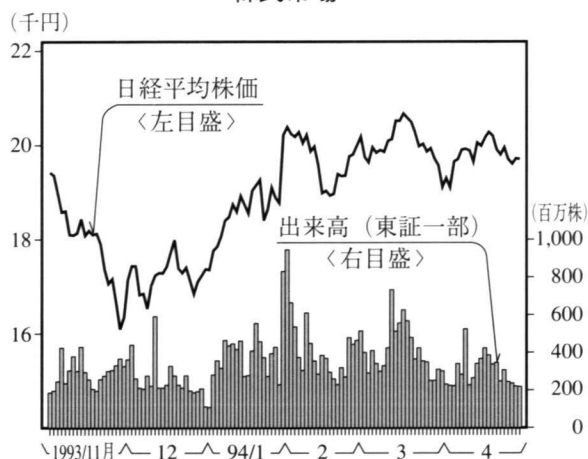
株式市況（日経平均株価）は、中旬にかけて上昇した後、下旬以降は為替円高や政局不透明観等から伸び悩み、結局19,725円で越月した（前月末比+614円）。また、株式出来高（東証一部月中1営業日平均）は2.99億株と前月（4.18億株）を下回った。

起債動向をみると、長期国債（10年物＜価格競争入札分＞）は、4月債がクーポン・レートが市場実勢比高めの水準に設定されたこと

2. 資本市場

4月の長期国債利回り（157回債）は、月中を通じて4%前後の水準でもみ合い、結局

株式市場



等から順調な入札となった後、5月債も総じて順調な入札となった（4月5日入札分＜4月債＞は募入平均利回り3.931%、応募倍率2.41倍、4月26日入札分＜5月債＞は募入平均利回り4.076%、応募倍率1.81倍）。一方、中期国債については、4年物がクーポン・レートが市場実勢比やや低めに設定されたこと等から低調な入札となり、2年物についてもやや低調な入札となった（4月12日入札分＜4年物＞は募入平均利回り3.336%、応募倍率1.41倍、4月19日入札分＜2年物＞は募入平均利回り2.516%、応募倍率2.21倍）。また、短期国債についても低調な入札となった（4月6日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.233%、応募倍率1.36倍）。

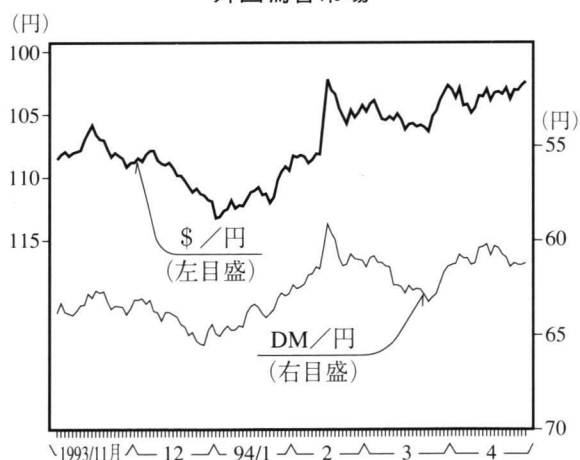
4月の国内公募普通社債は、債券市況がもみ合いに推移する中、3,350億円の発行となった（3月1,950億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（4月払込み分、増資を除く）は前月を下回った（3月3,100億円→4月1,200億円）。

3. 外国為替市場

4月の円の対米ドル直物相場（終値）は、上旬に一時弱含んだが、中旬以降は米国債券・株式市況がやや不安定化したことや、わが国の政局が日米通商交渉に悪影響を与えるのではないかとといった市場の懸念などを背景に円高化し、結局102.38円で越月した（前月末102.80円）。一方、円の対独マルク相場（東京市場、終値）は、月中を通じて61円をはさんだ小動きの展開となり61.18円で越月した（前月末61.45円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は139.8億ドルと、前月（163.5億ドル）を下回った。

外国為替市場

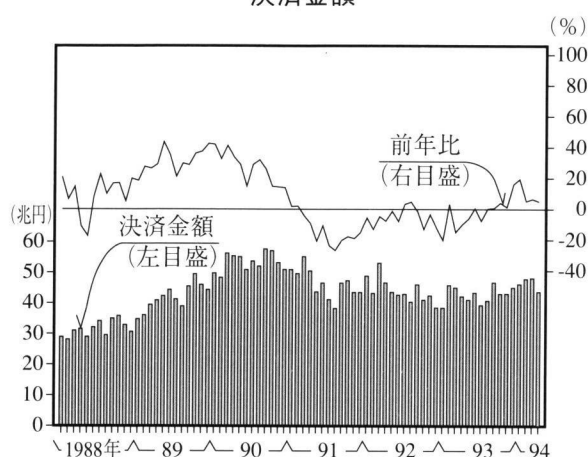


4. 決 済

4月の資金決済の金額（1営業日平均）を見ると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△10.1%）一方、全銀システム

取扱高（前年比+5.4%）、外為円決済交換高（同+12.6%）はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録（前年比+2.3%）は前年同月を上回った一方、振込口座振替（同△3.1%）は前年同月を下回った。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

4月の資金需給をみると、銀行券要因が1兆4,077億円の不足（前年同月1兆6,377億円の不足）となった一方、財政等要因は、普通交付税交付金や公共事業費等の支払い等が嵩んだため、3兆9,653億円の余剰（同6兆7,186億円の余剰）となった。こうしたことから全体では2兆5,576億円の余剰（同5兆809億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行は貸出の回収やF B売却等により資金を吸収した。

5月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因は連休行楽資金の還流を中心に月中1兆8,000億円程度の余剰（前年

同月2兆2,630億円の余剰）となる見通しであることに加え、財政等要因も国債償還等の支払いが嵩むことから2兆8,600億円程度の余剰（同4兆9,617億円の余剰）となる見通しであり、全体では4兆6,600億円程度の資金余剰（同7兆2,247億円の余剰）と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

3月のM₂+C D平残前年比伸び率は+2.0%と前月に比べ0.5%ポイント上昇した。通貨種類別にみると、預金通貨、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.3%と前月に比べ0.3%ポイント上昇した。

4月の銀行券平残前年比は+4.5%と前月を下回った。

4月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+2.4%と前月と比べて伸び率を高めた。一方、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）前年比は+0.3%と既往ボトムを更新した。

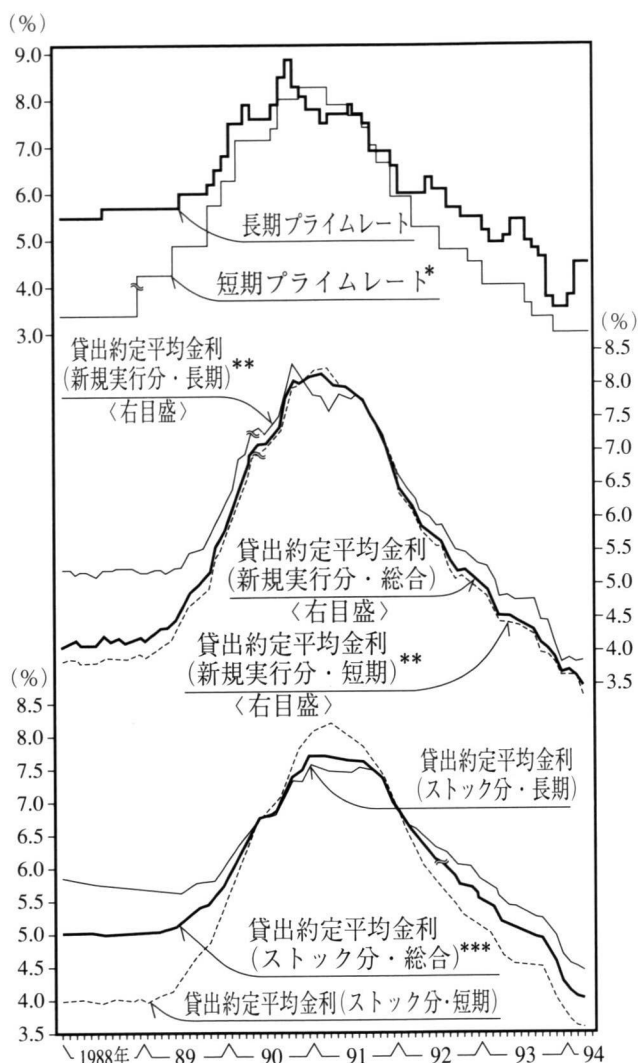
7. 貸出・預金金利

3月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、長期が2か月連続の長期プライムレート引き上げ（2月10日+0.3%、3月10日+0.6%）等を背景に小幅上昇した（前月比+0.047%）ものの、短期が引き続き低下した（同△0.169%）ことから、総合も低下（同△0.098%）し、5か月連続で既往ボトムを更新した（総合：2月3.582%→3月3.484%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越、総合ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比 $\Delta 0.061\%$ 、長期：同 $\Delta 0.056\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.019\%$ 、総合：同 $\Delta 0.052\%$ ）、既往ボトムを更新した（総合：2月4.231%→3月4.179%）。

この間、3月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比上昇した（2月1.977%→3月2.051%）。

貸出金利（全国銀行）



（注）* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの数の銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

（調査統計局）